

### 隱岐國竹島に關する舊記

田中阿歌麻呂

同島は去二月二十二日島根縣令を以て公然我が帝國の範圍に入り行政上隱岐島司の管轄とせられたり而して其當時吾人は同島の外國人に依り發見せられたる事實及地形に關する一般を紹介し置きたるが(本誌第十七頁九十六號參照)此地は去る五月二十七八日の日本海の海戰に依りリアンコート Liancourt Rocks 岩の名稱の下に世上に知られたり今此島の沿革を考ふるに其發見の年代は不明なれどもフランス船リアンコート號の發見より遙に以前に於て本邦人の知る所なり徳川氏の時代に於て之れを朝鮮に與へたるが如きも其の以前に於て此島は或は隱岐に或は伯耆石見に屬したり明治の初年に到り正院地理課に於て其の本邦の領有たることを全然非認したるを以て其の後の出版にかゝる地圖は多く其の所在をも示さざるが如し明治八年文部省出版宮本三平氏の日本帝國全圖には之れを載すれども帝國の領土外に置き塗色せず又我海軍水路部の朝鮮水陸誌にはリアンコート岩と題しリアンコート號の發見其他外國人の測量記事を載するのみなり故に聯合艦隊司令長官報告大海報第一一九號にも之れを襲用してリアンコート岩として報ぜられ大本營海軍幕僚は其後是を竹島に訂正(六月十五日官報六五八六號所載)せられたり予は嘗て井上頼國氏の懇篤なる助力に依り内閣文庫所藏の圖書に依り竹島に關する舊記を閱覽することを得たり圖書の主なるものを列記すれば

竹島考

伊藤東涯

竹島圖說

金森謙

多氣甚麼襟誌

松浦竹四郎(源弘) 嘉永七年十一月

松浦氏は地理に熱心なる人なり而して其記事の管に正確なるのみならず著書中當時の人心にして竹島を無視せる事を慨嘆せるの文字さへあり予は竹島に關する記事を輯むるに際し其多くを氏の多氣甚麼襟誌に依り他に二三の材料をも參照しぬ記事或は正鶴を失するや未だ計る可からざるも暫く此の材料にて同島に關する沿革及舊記に依れる地理を記載すべし

#### 第一、沿革

竹島一に他計甚麼又は舳羅島と云ふ島に大竹藪あり竹の周圍二尺に達す其竹極めて大なるが故此名ありしが如し同島に關し最も古き記事として傳はれるものは北史卷の十四(十九丁裏まで)倭國傳末の記事なりとす是れに由るに遣文林郎斐世清使倭國度百濟行至竹島南望耽羅島云々の句あれども斐世清なるものは小野妹子に従ひて來朝せしものにして其來朝の年は推古帝十五年即ち隋の煬帝大業三年(西曆六百〇七年)なりとす而して松浦氏の既に云へるが如く北史の竹島なるものは果して此島なるや否や容易に判定し能はず其他竹島に關し一二の記録あれども一として信ず可きものなし

伯耆民談に依るに伯州米子の町人に大谷村川の兩氏は代々名ある町人にて子孫は今にも町年寄を勤む此兩人竹島渡海免許を蒙る事は當國前太守中村伯耆守忠一とあり又慶長十四年(一六〇九年)